

教育学部・国際協力推進プラットフォーム連携プロジェクト

「カンボジア王国における国際教育協力事業」

山口大学の学校教育支援拠点校の確立と教員志望
学生海外研修モデルの構築に関する実践研究

平成24年度

現地支援活動報告書

(平成25年3月)

教育学部

和泉研二 友定保博 海野勇三

佐伯里英子 鎌田潤一 入江航生

目 次

I	はじめに ～プロジェクトの経緯と本年度からの方向性について～ 和泉 研二 (山口大学教育学部理科教育選修・教授)	1
II	訪問状況について 和泉 研二 (山口大学教育学部理科教育選修・教授)	8
III	カンボジアの子どもたちに学校体育を ～北部チョンカル村での運動会開催の試み～ 海野 勇三 (山口大学教育学部保健体育選修・教授) 入江 航生 (山口大学教育学部保健体育教室・3年)	10
IV	シェムリアップPTTCにおける保健教育の充実に向けて 友定 保博 (山口大学教育学部保健体育選修・教授)	26
V	カンボジアの学校保健の現状について 佐伯 里英子 (山口大学教育学部附属教育総合実践センター・客員准教授)	31
VI	カンボジアにおける支援活動についての考察 ～現地での授業実践及び校内報告会を通して～ 鎌田 潤一 (山口大学教育学部附属光小学校・教諭)	36
VII	おわりに 和泉 研二 (山口大学教育学部理科教育選修・教授)	42
	謝辞	43
	報告会に関する活動資料	44

I はじめに ～プロジェクトの経緯と本年度からの方向性について～

山口大学教育学部理科教育選修 教授 和泉研二

国際貢献は大学に課せられた重要な責務の一つである。そこで、アジアの発展途上国の学校教育や教員養成に関する支援活動を実施することをミッションとして掲げ、また、その支援活動を通して、国際貢献、国際理解、日本の教育の理解、国際的な視野の育成等、学生への教育効果をあげるべく、平成20年度、学部内の有志により「教育国際支援プロジェクト」チームを結成した。

組織立った支援の経験がなく、足がかりさえない状態からのスタートであったが、下記の3段階をビジョンとして見据えながら、この5年間、継続的に活動を行ってきた。

本報告書では、これまでの活動を振り返るとともに、本年度の活動状況を、本プロジェクトより派生したカンボジアにおける運動会の状況とともに報告する。

ビジョン

第1段階：途上国の教育について情報収集を行うとともに、現地に赴き現状を観察分析し、課題を発掘する。

第2段階：現地の状況により適した教員研修支援の在り方を検討するため、現地の小学校において支援の試行を実施する。

第3段階：以上の準備期間を経て、国内外の行政機関、JICA、NGO等と連携をはかりながら国際支援プロジェクトを計画し実施する。

1. これまでの活動概要

これまでの活動の概要は以下の通りである。

1) カンボジアへの渡航① 平成20年10月5日～10月16日

参加者：阿部弘和（理科）小粥良（国際理解）和泉研二（理科）

報告書：「カンボジア王国基礎教育調査」—カンボジア王国の学校教育と教員養成の現状と問題点に関する現地調査

初年度である平成20年度の活動は、課題発掘調査が目的であった。その後のカンボジアでの活動拠点となるワット・ボー小学校やシェムリアップ州教員養成学校 (PTTC)を初めて訪問したのもこのときである。また、この年には、シェムリアップ州の郊外の小中学校、プノンペンにある JICA カンボジア・オフィス、中学校教員養成校 (RTTC)、国立教育研究所、プノンペン大学等、飛び込みを含めて、まずは実態を自分たちの目と耳で調査し、支援の可能性を探っていた。

2) カンボジアへの渡航② 平成21年7月19日～7月26日

参加者：石井由理（国際理解）

報告書：「カンボジア国農村地域における教育改善プロジェクト」-事前調査
教育学部有志で結成している「教育国際支援プロジェクト」および本プロジェクトのメンバーである石井教授が行った活動である。その際、前年度の交流に引き続いてワット・ボー小学校に赴き、さらに交流を深めた。

3) ワット・ボー小学校教員の山口大学への招聘と研修

平成22年11月26日～12月5日

参加者：ブン・キム・チェン（校長）、マー・パーラー（教諭）、田中千草（校長補佐）、企画・受入責任者：石井由里（国際理解）

報告書：「国際協力活動推進プラットフォーム ワット・ボー小学校教員招聘プロジェクト」

石井教授が責任者となって企画した招聘プログラムである。信頼関係が深まるとともに、実際に、日本の大学や小中学校を見てもらうことにより、学校保健や安全指導の必要性など、カンボジアのニーズと合致するものは何か、協働で考えることができたことは、次年度の活動を計画する上でも、意義深い活動であった。

4) カンボジアへの渡航③ 平成23年3月5日～3月12日

参加者：和泉研二（理科教育）、海野勇三（保健体育）、友定保博（保健体育）、阿部弘和（オブザーバーとして個人参加）

報告書：「カンボジア王国基礎教育調査」—アジア地域における国際協力事業—カンボジア王国 Siem Reap 州教員研修支援のモデル構築に関する研究—実地調査報告書

平成22年度には、それまでの調査・活動を踏まえ、ビジョンの第2段階として、以下の3つの活動を実施した。試行ではあるが、実質的な現地における教育支援活動として、示師授業と講習会実施をスタートの年となった。

- (1) カンボジアが国策として充実を図っている理科授業の試行（和泉）
- (2) これまでのプロジェクトを通して信頼関係を構築したカンボジア王国 Siem Reap 州のワット・ボー小学校において、学校保健に関する現職教員を対象とした講習会の実施（友定）
- (3) 新しく教科となる体育を中心としたカンボジアの学校教育事情の調査（海野）

5) カンボジアへの渡航④ 平成23年12月11日～12月18日

参加者：和泉研二（理科教育）、海野勇三（保健体育）佐伯里英子（実践センター、養護）、田中大輔（附属光小、体育）、林秀晃（理科教育）

4年生)、阿部弘和(元教育学部理科教育教授)

報告書: アジア地域における国際教育協力事業 ―カンボジア王国 Siem Reap 州教員
研修支援のモデル構築に関する研究―実地調査報告書(2)

平成23年度は、これまでの実績を踏まえながら、初めて現職の小学校教員と大学生が調査チームに加わり、以下の活動を実施した。

カンボジア教員からの質問や要望に応えるためには、学校現場をよく知る人材が現地で活動することが必要である。現地のニーズの高い学校保健については養護教諭として経験豊富な佐伯客員准教授に、授業については、正課として導入された体育の授業を実施することとし、附属光小学校の田中教諭に参加を依頼した。また、本支援活動を教育学部の学生の教育にどのように還元できるかを模索するため、理科教育選修の学生1名(4年、林秀晃)を現地派遣メンバーとして加え、プノンペン大学学生との交流および帰国後の報告会実施を試みた。

試行的ではあるが、ワット・ポー小学校での授業や講習会の実施が2年目を迎え、現地の状況把握も大分進んだ中、本プロジェクトもビジョンの第3段階に向けて、支援の在り方を総合的に検討する時期であると判断した。そこで、小学校および大学でのアンケート調査を実施するとともに、あためてカンボジアにおける日本からの支援の実態を総合的に把握するため、日本大使館、JICA、NPO法人等で調査を行った。

- (1) ワット・ポー小学校から要望の強かった学校保健の講習(佐伯)
- (2) 新しく正課として取り入れられた体育の授業の試行(田中)
- (3) 支援活動の行き届いていない地域での山口大学支援拠点の探索
(運動会の舞台となるチョンカル小学校初訪問)
- (4) 支援の在り方を考える上で重要な要素である、カンボジアの小学生の生活実態の調査
- (5) プノンペン大学の大学生との交流(理科教育4年、林)、および交流の在り方を考える上で重要な要素となる、カンボジアの大学生の意識調査
- (6) 日本からの支援活動の実態調査および今後の方向性に関する調査
(在カンボジア日本大使館、JICA カンボジア・オフィス、
NPO 法シーセフ、NPO 法人ハート・オブ・ゴールド)

2. 平成24年度の方向性 ～平成23年度の実施を踏まえて～

これまで、カンボジアへの教育支援として、様々な一連の活動を行ってきた。ワット・ポー小学校との交流が始まるなど、予想もしなかった進展と多くの成果があった一方で、現地の教員および児童生徒の学力や日常生活の実態、現地の学校の施設・設備の実態、本

プロジェクトの現時点での予算的制約等、教育支援を行う上で支障となる、現実的に解決が難しい問題も浮き彫りになってきた。また、カンボジアは既に被支援大国としての一面をもち、様々な方面から支援が入っているという実態もある。

今後の支援活動をさらに充実したものとするためには、「山口大学としての独自性を発揮しながら、より有効かつ効率的な支援を目指す」という観点で支援活動の在り方を整理し、活動を焦点化することが必要である。

そこで、これまで積み重ねてきた活動を基に、これからの具体的活動を焦点化することとし、本年度の具体的活動を検討することとした。

1) 支援活動の焦点化 ～3つの支援活動と3つの拠点～

昨年度までの活動結果から総合的に判断して、本プロジェクトを以下の3つの支援活動と3つの拠点到絞った活動に焦点化することとした。

	支援活動	支援拠点	主な内容
No.1	教員養成への支援	・シェムリアップ教員養成学校 (PTTC)	・示師授業 (理科等) ・授業研究会開催 ・行事開催支援
No.2	現職教員への支援	・PTTC、ワット・ポー小学校、 ・チョンカル小学校を拠点とした学校群 (山口大学拠点校)	・教員講習会 (学校保健、学校安全等)、示師授業 (理科等) の実施 ・運動会開催支援
No.3	日本研修	・PTTC ・ワット・ポー ・チョンカル	・各校関係者の日本への招聘

(1) No.1 教員養成への支援 (シェムリアップ教員養成学校 (PTTC)への支援)

昨年度の報告書にも述べたが、カンボジアの小学校教員を取り巻く諸環境からすると、小学校教員に授業改善を促すような支援を行っても、現場の教員が授業改善に取り組むことは難しく、残念ながら、その効果に多くは期待できない。カンボジアの教員の資質向上のためには、これから教員になる学生への教育を支援するのが、より効率的・効果的であると考えられる。今後は、小学校教員を養成し、敷地内に附属小学校や理科実験棟も有しているシェムリアップ州の教員養成学校 (PTTC)Cを拠点校とした「教員養成支援」を、支援の一つの軸としたい。

支援活動の内容や形式としては様々な形態が考えられる。まず本年度は試行として、カンボジアの国として力を入れている理数教育に関して、附属光小学校教諭による示師授業の実施、また現地のニーズが高い学校保健安全教育に関する講習会の実施を計画した。

理科の授業に関しては、学生の学力、PTTC の理科実験室の設備状況等を考慮し、簡便にデータが取れ、そのデータをグラフ化する作業およびグラフから規則性を見出すといった組み立てが可能な授業とするよう、附属光小学校の鎌田教諭に授業計画を依頼した。

(2) No.2 現職教員への支援 (PTTC、ワット・ボー、チョンカル)

カンボジアにおける教育支援を先行実施している他大学の中には、現地の小中学校を拠点校として活動している大学がある。ワット・ボー小学校が、私たちにとってカンボジアでの最も大切な拠点であることには、些かも変わらない。しかし、ワット・ボー小学校はシェムリアップ市内に位置し、日本から数々の教育関係者や学生も訪れており、山口大学独自の拠点校という位置づけには馴染まない状況にある。一方、一步郊外に出ると、遥かに支援を必要としている数多くの学校が存在する。

そこで、本年度の活動の目的として、ワット・ボー小学校に加えて、支援の手がほとんど入っていない学校への支援活動の実施、および山口大学独自の新たな拠点校の開拓を目指すこととした。

その有力な拠点校候補が、平成23年度に訪れたチョンカル小学校およびチョンカル小学校をクラスターの中心校とする小学校群である。カンボジアには中核となる学校を中心に教員研修を行う制度があり、実際に研修を行っている学校や学校群（クラスター）がある。チョンカル小学校を拠点に、チョンカル群の小学校全体を山口大学の拠点地域として、支援活動を展開できる可能性がある。

支援活動の内容としては、学校の施設・設備等の教育環境や地域性等から総合的に判断し、支援の中心を海野教授の発案による「運動会の実施」に絞り込むこととした。当初、正課になった保健体育の授業への支援を模索したが、カンボジアの現状は、そのカリキュラムを実施できる状況にはない。むしろ、運動会を通じた教育支援、地域支援が有効との海野教授の判断による。

(3) No.3 日本研修

カンボジアの教員が、保健室、養護教諭、体育の授業、探求的学習などの授業・制度や教育上の概念など、その重要性・必要性を真に理解し、使命感をもって自ら進んで継続的に行動できるようになることが、支援の究極的なゴールの一つと考える。そのためには、核になる教員の養成が必要であろう。ミドルリーダーの養成支援の方策として、現職教員

や養成学校教員、また教育行政に関わる人などを山口大学に招聘し、日本での研修をすることが望ましいと考える。本年度は、予算の都合により実施を見送るが、将来的な支援の柱として実施の可能性を模索したい。

2) 現職教員・学生の参加および事後報告会について

前回、平成23年は、養護教諭として経験豊富な佐伯客員准教授と附属光小学校の田中教諭が参加した。これは、カンボジア教員からの質問や要望に応えるためには、学校現場をよく知る人材が現地で活動することが必要であるとの判断に基づくものであり、結果としても現地で大変好評であった。

また、理科教育選修の学生1名(4年、林秀晃)を現地派遣メンバーとして加えたのは、本人の成長は言うまでもなく、本支援活動を教育学部の学生の教育にどのように還元できるかを模索するためでもあった。帰国後、理科教育専修を中心に行っている「ちゃぶ台理科ネット」の活動の一貫として、年度に現職教員も参加して開催している「理科ちゃぶ研修会」において、カンボジアでの活動を林君自身により報告してもらう機会を設けた。友人、同級生、先輩である林君が行う活動報告は、報告を聞く学生にとって、より身近に感じられ、国際貢献や教育そのものに対する興味関心が高まったようである。

同様の報告会は、附属光小学校の田中教諭の担任するクラスである6年1組および全校に対しても実施した。自分たちの先生が国際貢献を行う姿は、海外の国々や人々に対する子どもたちの興味関心を引き起こすという学習指導の面だけでなく、自分たちの先生が海外で活躍する姿を見聞きすることは、子どもたちにとってもあこがれであり、誇りと感じる子どもたちも見受けられ、生徒指導上の効果もあったものと推察される。

3) 本年度の活動計画

以上に基づき、本年度の活動を以下の通り計画した。本年度の特徴は、1) 昨年度に引き続き、現場同士のニーズによりの確に伝えるため、現職の小学校教員(理科)をメンバーに加えたこと、2) 初めてPTTCでの支援活動を開始すること、3) 山口大学独自のあらたな拠点校を開拓すること、4) 帰国後の報告会を学部および附属小学校で開催することである。

(1) 教員養成支援(於、PTTC)

- ・理科示師授業(担当:鎌田、対象:学生および教員)
- ・学校安全講習会(担当:友定、対象:学生および教員)

(2) 現職教員支援(於、ワット・ボー小学校)

- ・理科示師授業(担当:鎌田、対象:児童および教員)

- ・学校保健講習会（担当：佐伯、対象：教員）
- (3) 拠点校構築調査および打合せ（於、チョンカル小学校及びクラスター）
 - ・チョンカル小学校及びクラスター校調査（担当：全員）
 - ・運動会打合せ及び事前調査（担当：海野、入江）
- (4) 帰国後の報告会の実施（於、教育学部（理科ちゃぶ）、附属光小学校）
 - ・「理科ちゃぶ」研修会での報告（担当：和泉、海野）
 - ・附属光小学校での報告（担当：鎌田）

以上、総合的な企画・運営・調整および取りまとめを和泉で行い、教育学部長裁量経費、山口大学国際協力推進プラットフォーム、附属光小学校教員研修費より資金援助を受けて、平成24年11月14日から21日の日程で、支援活動および調査を行った。

なお、帰国後の報告会についての記載は、本報告書では省略する。参考として、学部内での報告を行った「理科ちゃぶ」研修会の開催要項およびポスターを末尾に添付した。また、附属光小学校での報告会に関しては、鎌田が第VI章で触れている。

II 訪問状況について

山口大学教育学部理科教育選修 教授 和泉研二

概要は、以下のとおりである。なお、記載した活動の他、17日（土）や20日（火）を中心に、運動会用に現地で調達できる物品等の調査や調達、理科授業での利用が考えられる現地で入手可能な物品等の調査を行った。

1. シェムリアップ 初等教育教員養成学校

(Siem Riap Provincial Teacher Training Center (PTTC))

日時：11月15日（木）（午後）

訪問者：和泉、友定、鎌田

主な対応者：LeavOra 校長

- 主な活動：1) PTTC 校長、LeavOra 氏からの聞き取り調査
2) 理科師範授業および学校安全講習会実施の打合せ
3) 校舎、理科棟、一般教室、附属小学校授業等の見学

日時：11月16日（金）

訪問者：和泉、友定、海野、佐伯、鎌田、入江

主な対応者：PTTC 教員十数名（理科示師授業または学校安全講習会に参加）

- 主な活動：1) PTTC における学校安全保健関係の授業見学
2) 学校安全講習会の実施
3) 理科示師授業の実施
4) 学校施設・設備、附属小学校を含む授業等の視察

2. ワット・ボー小学校 (Wat Boo)

日時：11月15日（木）

訪問者：和泉、友定、海野、佐伯、鎌田、入江

主な対応者：プン・キム・チェン校長、田中千草校長補佐ほか

- 主な活動：1) 校舎、授業、音楽隊活動視察（学校安全点検を含む）
2) 学校保健講習会の実施（午前1回、午後1回）
3) 理科示師授業打合せ（午前）および授業実施（午後）
4) 保健室消耗品の整理・使用法の指導および寄贈

日時：11月20日（火）

訪問者：和泉、友定、海野、佐伯、鎌田、入江

主な対応者：プン・キム・チェン校長、田中千草校長補佐ほか

主な活動：1）次回支援活動に向けた聞き取り調査

3. チョンカル小学校およびチョンカルクラスター学校群

日時：11月18日（日）、19日（月）

場所：ウドンマイチェイ州

主な対応者：各小学校校長ほか

訪問者：和泉、海野、友定、佐伯、鎌田、入江

主な活動：1）チョンカル小学校の広場等、運動会に向けた現場状況調査

2）運動会実施打合せ

3）宿泊施設、食堂、集会場等、運動会実施に向けた周辺調査

III カンボジアの子どもたちに学校体育を

——北部チョンカル村での運動会開催の試み——

山口大学教育学部保健体育選修 海野勇三
山口大学教育学部保健体育教室 3年 入江航生

はじめに

これまで筆者らは「カンボジアの子どもたちに学校体育を提供したい」、「ゆきとどいた学校体育を」とまでは望まない（望めない）までも、せめて「必要にして最低限度の学校体育」をカンボジアの子どもたちに提供したいとの強い思いを胸に、山口大学国際協力活動推進プラットフォームおよび教育学部長裁量経費による助成を受けてカンボジアへの視察調査を続けてきた。そして2013年1月22日、ようやくカンボジアにおける学校体育の振興に対する教育協力の第一歩として、北部チョンカル村の学校クラスターの中核校であるチョンカル小学校にて全校運動会を開催するまでにこぎつけることができた。以下では、「カンボジアの子どもたちに学校体育を」をテーマに学生ボランティアとともに取り組んできた国際教育協力活動について報告したい。

1. これまでの経過と課題意識

チョンカル村で運動会を開催するに至るまで、三度にわたる課題探索的調査と一度の運動会開催構想をめぐる協議のために現地を訪問した。それら結果の詳細は、報告書（海野；2011、海野；2012）にまとめてあるが、ここで簡単にこれまでの経過について確認しておきたい。

1) 第1次（2011年3月）課題探索的調査

初めての訪問となる第1次探索的調査では、アンコールワットで知られる観光都市シェムリアップとその近郊エリアを中心に、小・中学校と教員養成所（PTTC）を視察し、関係者にインタビューを行った。その目的は、“カンボジアの学校で教育活動の一環としての「体育」が実施され定着していく上で、どのような条件が整えられる必要があるのか？”このことを自身の五感をフルに動員して感じ取ってくることであった。その結果、次のような実感を得た。

○現地の子どもたちは猛暑の中じつに活発に運動遊びに興じていた。彼らの子どもらしい好奇心とバイタリティに触れた時、もし仮に学校がカリキュラムとして体育・運動遊びの指導に取り組んだならば、きっと子どもたちは嬉々として取り組むであろうことを確信した。

○他方、学校の教師の実態は、子どもたちのあの笑顔と活動的な姿とは対照的に、どこか疲れているような、誤解を恐れずに言えば、教師という仕事を楽しまないような印象を持った。確かに教室での座学では、黒板を背に授業をしているのだが、その授業にも「勢い」というものが感じられなかった。インタビューをしたところ、その背景には、教職による給与では家計が成り立たないため、ほとんどの教師は、始業前または終業後に副業を持っていて、したがって教材研究や指導力向上のための研修参加もままならないのが現状とのことであった（楠：2010、山口：2012）。

○体育が教科として行われるには運動用具と運動するための施設が欠かせない。しかし、学校の道具不足は深刻で、シェムリアップ市街地にある大規模小学校（全児童数およそ5000名）でさえ、短なわとびが10本程度（柄の部分は破損している）、ボールが大小合わせて12～13個程度（ほとんど擦り切れ寸前、空気の抜けた状態）、それにフライングディスク

が数枚あるのみであった。農村部の小学校にいたっては見るも無残な状態で、穴の空いてないボールがわずかに1個残っているだけであった。また運動施設に関しては、当然のことながら、体育館やプールなどは望むべくもないが、グラウンドと呼べる広さの校庭を所有している学校すらほとんどない。さらに適度な広さをもつ校庭にも、乾季の直射日光を遮るために枝ぶりのいい大木が植えてあったり、中央に水を汲む井戸が設置されていたりと、まとまったスペースもない状態であった。

○カンボジアには雨季と乾季があるが、乾季には強烈な太陽光が照り気温は40度を超える。子どもたちはその中でも嬉々として遊びに興じていたが、屋内体育施設が未整備の中、女性教師が強い陽光のもとで体育を指導することはおよそ想像できない。また雨期になると洪水で学校ごと浸かるという。気象的な条件は最悪とまでは言わないが、相当に厳しい(山口：2012)。

○家庭・保護者の状況に関しては、都市部と農村部の格差、富裕層と貧困層の格差が予想以上に大きかった。そのことは、保護者の教育への意識にも反映する。すなわち一方で都市部・富裕層に過剰な教育熱が認められる(⇒ダブルスクール・校区外入学など)反面、農村部・貧困層の中には学校教育への無理解も存在していた(⇒進級率・卒業率・進学率の低さ)。以上が、第1次探索的調査で得た感触の概要である。この段階では、私たちにできる「支援」と「協力」の中身はどのようなものになるのか?に関しては未だはっきりとしないが、少なくとも、日本の現行の体育(の教育目的・教育内容・教育方法)をそのままカンボジアに持って行ったとしても決して効果を上げることはないであろうことだけは確認できた。同時に今後、カンボジアの生活現実に根差した体育(=生活体育)の可能性を探っていくことの必要を痛感した。

2) 第2次(2011年12月)課題探索的調査

第2次調査では、シムリアップから北へおよそ130キロあるチョンカル村とカンボジアの首都プノンペンを訪ねて探索的調査を実施した。北部チョンカル村を訪ねたのには訳がある。それは第1次視察調査でガイド兼通訳として同行してくれたV氏の、帰国間際に発したさりげない一言(助言)がきっかけであった。V氏によれば、私たち調査団が視察した「カンボジアの子どもと生活と学校」はあくまでシムリアップのそれであり、「『本当の』カンボジアの子どもと生活と学校を知るには、もっと別の地域に足を踏み入れないと・・・」と言う。その言葉の真意を尋ね直したところ、シムリアップはカンボジアではアンコールワットへの観光の表玄関にあたる都市であり、すでに世界各国のNPOによって相当の支援が入っている。言い替えると、私たちが感じ取ったカンボジアの子どもたちの生活と学びと育ちの現状は、カンボジアでは条件的に恵まれた地域の現状なのであって、交通手段の整わない地方の村々では今なお支援がほとんど入っていない中、劣悪な条件に置かれている。V氏はそのような地域にこそ目を向けて欲しいというのである。

また、プノンペンへの訪問には三つの目的があった。それは、

- ①この間、カンボジアで体育の振興のために熱心に支援活動に取り組んできた日本のNPO/NGO(Hearts of Gold)事務所を訪問し、支援の経過と現状に関し聞き取り調査および資料収集を行うこと、
- ②JICA事務所を訪問し、カンボジアの学校教育に関する調査報告書の収集と国際教育協力にあたって踏まえるべき原則(的視点)について示唆を得ること、
- ③カンボジア初の教育学部設置構想及び教員養成制度改革の取り組みに関し聞き取り調査をすること、

であった。詳述は避けるが、第2次調査から筆者は下図のようなある種の違和感を強く持った。すなわちそれは次の4点である。

- ①カンボジアへの国際教育協力は多くの国・団体・個人が多様な支援活動を展開している、
- ②しかし、それらは一定の合意された統一方針のもとで有機的な連関を持って実施されてはいないのではないのか？

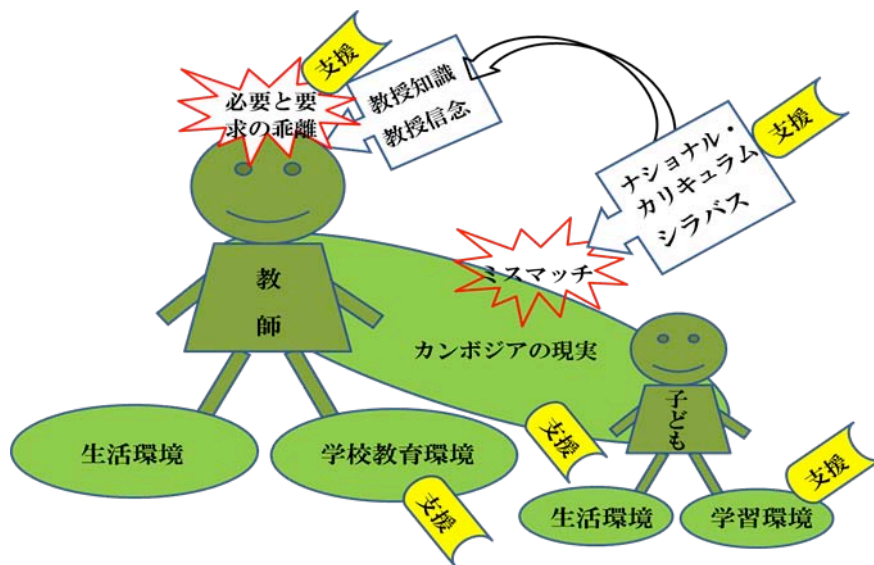


図1 カンボジアにおける教育支援の現状

- ③加えて、展開される支援活動が現地の実情や現場の人々の必要と要求にマッチングしていないものも少なくないのではないのか？
- ④その結果、一つ一つの善意から発する支援が必ずしも有効に機能していない (=生きていない) のではないのか？

ということである。もちろん国際教育協力のすべてがそうだというのは毛頭ない。しかし、第1次・第2次にわたる課題探索的調査のなかでそのように思わざるを得ない現実を少なからず目の当たりにしてきた。使用されていない井戸、校庭の真ん中に鎮座する井戸、子どもと教師のいない立派な校舎、教師の手に届けられないカリキュラムやシラバス、朽ち果てた木製の固定遊具、子どもの手に渡らない支援物資、などなどである。

いずれにせよ第2次調査の結果は、前回調査で感じ取った内容、すなわち①日本の体育の授業イメージをそのままカンボジアに持ってきても決して効果を上げることはないであろう、②カンボジアの現状(当事者の必要と要求)にマッチングした体育=生活体育の可能性を探っていくことが必要であろう、の2点を改めて痛感させるものであった。

2. 第3次(2012年3月)第4次(2012年11月)調査(運動会開催の提案と環境調査)

第2次調査で足を踏み入れた北部チョンカル村の学校の教育環境条件は想像以上に劣悪であった。とりわけ学校体育を実施するという観点からみると、教材・教具、施設の貧困は目を覆うばかりである。この悪条件では、2009年にナショナル・カリキュラム上体育の授業が必修教科(週2時間)として設定されたとはいえ、到底実施されるはずもない。事実、訪問した学校の校長や教員に聞き取り調査したところ、「体育の授業を実施しようにも道具も施設もないので実施していない」「どうしていいかわからない」「クメール体操を指導するのがせいぜい」とする声がほとんどであった。

そこで第3次訪問では、前2回の課題探索的調査に続くセカンド・ステップとして、「カンボジアの現状(当事者の必要と要求)にマッチングした体育=生活体育」の具体化に向けて、以下の5点からなる基本方針を持って臨んだ。

- ①いきなり「体育授業を実践しよう」などと、学校と教師に求めない（→体育の必要と意義について、教師と子どもたちに感得してもらうことを優先する）
- ②現地の実情に合った（「それならやってみたい」と納得の得られる）体育を構想する
- ③背伸びをしなくても取り組める体育を構想する
- ④やってみて、徒労感でなく効力感の得られる体育を構想する
- ⑤当面はチョンカル小学校の一点突破に徹し、そこからクラスターの各学校への面的な広がり効果を期待する

こうした方針を胸に、チョンカル村の学校クラスターの中核校であるチョンカル小学校を再度訪問し、こちらから校長先生に対して提案を行った。その提案とは、村をあげての運動会（チョンカル小学校大運動会）の開催である。2回にわたる探索的調査では、カンボジアの学校においてどんな行事が実施されているのかについては十分に事情を知ることはできなかったが、運動会やクラスマッチなど季節的イベント型の体育行事ならば、必ずしも全校規模でなくとも学年単位あるいは学級単位と、その規模と内容・方法を問わなければおそらく体育授業よりもっと実現の可能性は高いと推察される。その際、日本の学校で実施されている体育行事をイメージする必要などないし、してはいけない。それぞれの学校が置かれた条件の中で可能な運営・計画を描き出すことができれば運動会を実施できるであろう。もちろんその場合も最低限の道具が用意されていなければならないことは言うまでもないが。

校長先生に日本の小学校で実施された運動会のダイジェスト版 DVD を視聴してもらいながら、単刀直入に「チョンカル小学校でこの運動会をやってみませんか」と提案した。“地域が学校に結集する”イメージが伝わるように、言いかえれば、地域づくりを意図した運動会を学校の中に組織していく構想を丁寧にかつ意識的に熱く語った。すると校長先生からは矢継ぎ早に質問が繰り出され、次第に「その気」になり、最後には「やる気満々」の意気込みを聞かせてくれた。こうして熱気のこもった論議の末に筆者と校長先生との間で取り交わされた確認書が「チョンカル村大運動会の開催イメージ」である。

チョンカル小学校大運動会の開催イメージ

日時：2013年1月 午前9時から12時までの3時間

開催形態：山口大学教育協力ボランティアとチョンカル小学校の共催

協議を通じて確認された事項

- ・日本のプログラムと現地の伝統的な遊びをミックスさせ、事前練習を必要としない、観衆から笑いの取れるプログラムを組む
- ・準備や道具の調達にお金のかからない、身の丈に合った運動会にする
- ・国旗掲揚・校長挨拶・全体でのクメール体操・村長と教育委員会トップ、近隣の小中学校の校長先生の来賓招待
- ・屋台を校内に入れて飲み食いOKのにぎやかな運営
- ・来場者から学校運営への寄付を募る
- ・他教科で制作した絵や万国旗などを教室の外の壁等に張り出す等、合科学習的な運営とする
- ・清掃活動指導と運動させて前日準備
- ・赤・青・白組の縦割り集団で得点を競い、閉会式で優勝した組に校長杯を渡す（すべての子どもに鉛筆・ノートなどの参加賞を用意する）
- ・マイクや拡声器類はチョンカル小で、音楽と最低限の小道具は日本が用意する（日本で用意するもの・現地マーケットで購入するもの） etc

続く 2012 年 11 月の第 4 次訪問では、「チョンカル小学校大運動会の開催イメージ」の視点から、①学校の施設・道具・場所の調査・測量、②必要物品の現地マーケットでの調達可能性、③学生スタッフの現地での移動・宿泊・食事等の確保、④通訳スタッフとの打ち合わせ、等を実施した。

3. チョンカル小学校第運動会はこうして行われた（第 5 次訪問:2013. 1）

以下では、チョンカル村大運動会の開催に向けて学生ボランティアが国内でどのような取り組みを進めてきたのか、そして実際に現地で開催された大運動会での様子について報告するが、その際、可能な限りピクチャを多用しながら報告したい。その理由は、この度の取り組み経過や運動会の実像を文章表現によって他者に伝えることは容易ではない、もっと言えばかなりの限界があるように思うからである。現場の臨場感を文章に表現する困難に加えて、仮に表現できたとしてもそこにはバイアスがかかってしまう。それに対しピクチャは筆者の手による脚色は介入できないため、そこから何を感じ取るかはそれを見る者の側に委ねられている。筆者としては、ここに張り付けるピクチャの数々から、チョンカル大運動会の開催に至る取り組みの経過と実像を読者の眼で感じ取ってもらえればと期待している。

1) 運動会の開催に向けての学生ボランティアの取り組み（国内）

(1) プロジェクトの立ち上げ

第 1 ステップは、このプロジェクトに取り組む組織を立ち上げることであった。これまでの 4 次にわたるカンボジアでの現地調査の概要を筆者が担当する講義で学生に対して報告し、プロジェクトへの参加を呼び掛けたところ、13 名の学生が名乗りを上げてくれた。こうして筆者を含む 14 名で「カンボジアの子どもたちに学校体育の素晴らしさを届けるプロジェクト」が正式にスタートした。その後、他大学にも参加を呼びかけていき、結果、山口大学を中心に福岡地区 3 大学（中村学園大学・西南学院大学・近畿大学九州短期大学）の教員・学生総勢 50 名超のスタッフでボランティア活動を開始した。

(2) 組織体制の整備

プロジェクトの運営は、学生スタッフによる自治的運営を基本方針とし、企画立案・運営・総括のすべてを学生の手に乗せた。組織体制は以下のとおりである。

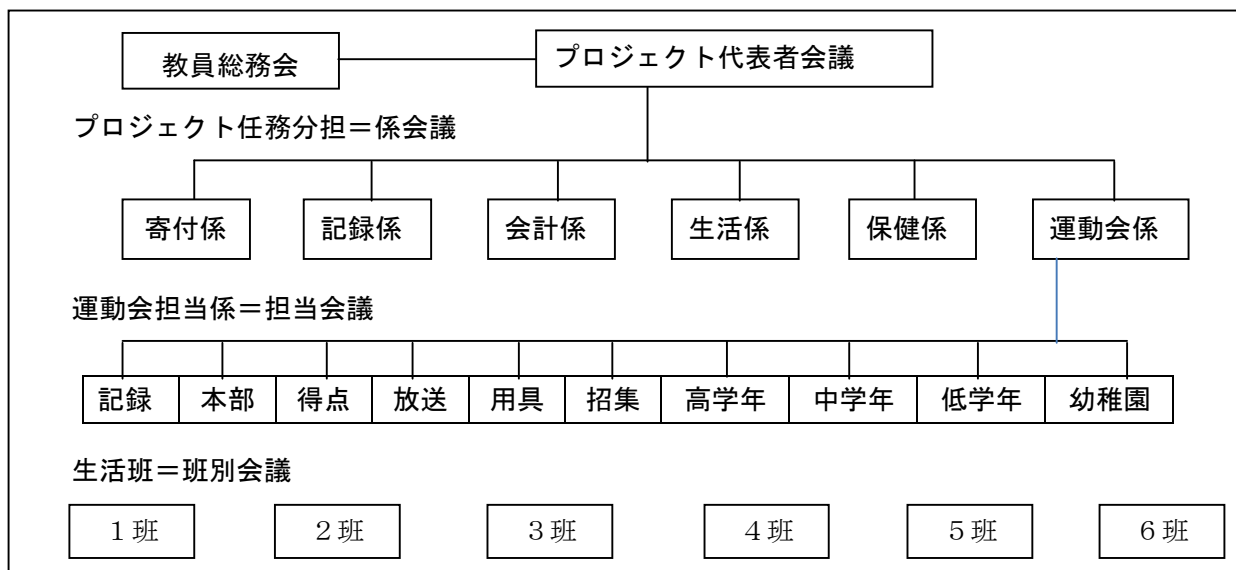


図 2 運動会プロジェクトの組織体制

(3) 運動会グッズと文房具の寄付を募る活動

チョンカル村の子どもたちの学習環境は相当に厳しいものがあつた。そこで運動会開催に合わせて参加賞として子どもたちに文房具を届けることを確認し、学生、市民、教育機関等に物品の寄付



を募る活動を展開した。新聞やテレビ・ラジオにも取り上げてもらい、4か月間で予想を上回る文房具の数々が寄付として届けられた（その数、段ボールで80箱超）。

(4) 競技種目の選定とプログラム作成

チョンカル小学校の子どもたち、先生たちさえも運動会は初めての経験であり、そのためどんな競技種目を選定するかが最も困難を極めた。最終的に「事前練習を必要としない」「観衆から笑いが漏れる」「道具にお金がかからない」の3条件を満たす種目として次の表のようなプログラムを決定した（種目名についてもクメール語に翻訳した時に児童が理解しやすいように工夫した）。

表1 チョンカル小学校大運動会プログラム

時間	学年	種目名	内容
8:00	全体	開会式	
8:30	5年	ボール運び競走	ボールが入ったかごのひもを持ち、ゴールまで落とさずに走る競走
8:45	1年	手つなぎ競走	2人組で手をつないで走る競走
9:25	2年	大切に運ぼうリレー	重ねた2個の段ボールを二人で落とさないように運ぶリレー
9:40	3年	大きいパンツ競走	二人組で大きなパンツを履いて、協力しながらゴールまで走る競走
9:55	4年	二人で3本の足競走	二人組で横に並んだ内側の足をひもで結んで、協力しながらゴールまで走る競走
9:00	5.6年	へびが網をくぐるリレー	5人がへびのように縦に並んで、途中の網をくぐり抜けて、次のへびにバトンを渡すリレー
10:15	幼稚園	どうぶつ体操	動物になって体操をする
10:20	幼稚園	お兄さんの尻尾を取ろう	子どもが男子学生を追いかけて、しっぽを取る遊び
10:30	1.2年	悪魔をやっつけよう	台の上に乗った悪魔の人形を紅白玉で投げつけて落とすゲーム
10:50	6年	キャンディ探し競走	途中に置いてあるキャンディを手を使わずに口で取ってゴールへ走る競走
11:05	3.4年	玉入れゲーム	2チームに分かれて、高い場所にあるかごに玉を投げて入れて、入った玉の数を競うゲーム
11:20	教員他	玉入れゲーム	
11:35	全体	閉会式	

2) チョンカル小学校大運動会の実際

(1) 現地での準備・打ち合わせ

初めて現地入りしたプロジェクトのスタッフは、事前学習を通じて思い描いていた環境と目の前の光景とのあまりの落差に戸惑いを見せていた。気持ちを切り替えてさっそく作業を開始する。各



初めて足を踏み入れたチョンカル



ここが会場？どこで運動会するの？

担当係長の指示のもと、校庭の正確な測量、担当別配置図の確認、運動会ポスターの貼り出し、横断幕の設置等々、テキパキと進めていた。



学生は現地調査



張り出し作業も難航



村中にポスターの張り出し

ところで「学生による自治的な運営」という基本方針は、スタッフにとって実際は極めてハードである。なぜならあらゆる事柄は、それを決定し確認するために、担当係会議で協議・決定→プロジェクト代表者会議で協議・決定→全体会議で提案・確認と、幾重もの会議を経なくてはならないからである。加えて、そうした決定プロセスは異論なくスムーズに進行するわけではなく、とりわけ参加者それぞれが意見をもって臨んでいる場合には議論百出である。しかし、そうした経験こそが学生たちの中に行事の企画・運営能力を育てていく。



総務会



担当者会議



全体会議



ファイルで確認

(2) 運動会前日の三つの活動—お絵かき・全校清掃・直前リハーサル—

運動会という行事を合科的・総合活動的に運営するために、運動会前日に三つの活動を組織した。

①お絵かき指導

学年ごとにテーマを設定して子どもたちに絵を描いてもらい、それを運動会で万国旗の代わりに飾り付けた。クレヨン・色鉛筆等はすべて市民から寄付されたものを使用した。彼らにとって真っ白な用紙にクレヨンで絵を描くこと、それ自体があまり経験しない活動のようであった。



②全校清掃

この活動は、事前協議の中で校長先生から出された提案であった。いわく「子どもたちはゴミをポイ捨てする習慣が染みついている」「家庭でもゴミを集めて捨てる習慣がない」「だから清掃活動もいい加減になる」というものだった。そこで運動会を開催することと関わらせて、“ケガをしないためにも”、

“地域の人々にきれいな学校を見てもらうためにも”、そして“自分たちもゴミのない、気持ちのいい教室で勉強できるために”清掃することの大切さを理解してもらうべく全校清掃を指導した。併せて学生スタッフはお手本として、校外に出ている



き、幹線道路から校門までの 300m をゴミ一つない道路にするべく、地域の人々が見守る中を清掃活動に取り組んだ。

③直前リハーサル

直前リハーサルには二つの意味がある。一つには、学生スタッフが当日の本番を想定して計画通り進行するかどうか？また、想定外の問題が生じた際どのようにそれに対応するかのシミュレーションの意味である。もう一つは、子どもたちに明日の本番への期待を膨らませてもらい、また先生たちには計画の全体と運営(補



助) の実際を経験してもらうことである。その意味で直前リハーサルは軽視してはならない。そのために、まずは学生の各担当係長からチョンカル小学校の全教職員に向け、運営計画と依頼する補助の中身に関し説明をして共通理解を図ることが欠かせない。

その後、子どもたちに赤白帽子が配られ、通訳を介して競技方法について説明したのち、いざ実施競技にチャレンジ。しかし、なかなか子どもたちに理解が徹底されない。招集場所に待機するまでに時間がかかる。道具の移動が間に合わない・・・。シミュレーションで得られた課題はその晩の会議で検討され、計画修正されていった。



生まれて初めてかぶる赤白



通訳を入れて懸命に解説する



理解してくれたか

(3) 本番ーチョンカル小学校大運動会ー

ここでは運動会の様子を時系列で追う叙述の方法は取らないで、運動会に参加した人に着目し、またなるべく筆者の解説を加えることを控えて読者にマン・ウォッチングしてもらうことで、繰り広げられた運動会の実像を捉えていただきたい。

①子どもたち

子どもたちの真剣そうな眼差し、そして満面の笑み。興味深いことに、学校でも地域でも集団で競い合うという経験がない子どもたちにとって運動会は集団的一体感を味わうまたとない機会となった

ようだ。自分の出場しない競技にも興味津々で見つめ、声援していた。また現地ではクメール体操と呼ばれる定型化された体操が存在するが、今回は日本のラジオ体操を紹介した。



まずい。時間がかかりすぎ



これ！面白い



開会を待つ子どもたち



ニコニコ顔でラジオ体操



②教師たち

子どもたちの招集・誘導、競技の説明、助け舟を出す先生。こうして彼らもまた運動会の運営を学んでいく。そして圧巻は、たまたらず飴喰い競争に飛び入り参加する先生たち。完全に運動会が作り出す世界・その券囲気に魅了されていた。実際、一番熱くなっていたのは先生たちだったかも知れない。



子どもたちの誘導を先生たち



ルールを説明する先生



助け舟を出す先生。やさしい



我慢しきれず、ついに先生も参戦

③地域の人々

地域の人々にとって「日本から運動会とやらがやって来た」という印象だろう。その視線は、わが子、わが孫の一挙手一投足に向けられてばかりではない。競技する子どもたちが作り出す独特のスポーツ空間、そして運動会が醸し出す臨場感と一体感を感じてくれていたように思う。



珍しそうにじっと見つめる保護者



パジャマ姿で観戦



ロープを張って侵入を制限



センターボールに陣取って応援する人々

④学生ボランティアたち



彼らはなぜここまでできるのか？流れ落ちる汗。潮を吹く肌。乾く喉。なぜ笑顔でいられるのか？それは彼らみんな、今この瞬間が「誰のための運動会なのか？」「何のための運動会なのか？」を頭とハートに刻み込んでいるからではないだろうか？下の写真に写る笑顔と涙のコントラストがいい。



時間が経つほどに感動と効力感が津波のように彼ら一人ひとりの胸に押し寄せてきたのだろう。

筆者はこう思う。「カンボジアの子どもたちに学校体育のすばらしさを届けよう」を合言葉に、彼らは出し惜しみすることなく「一肌脱いだ」。一肌も二肌も脱いだ彼らはカンボジアで成長した。まさに「一皮剥けた」ように思う。実は学生ボランティアが一番いい思いをしたのかもしれない。

4. 地域とつながるということ

じつは、チョンカル小学校大運動会は裏側でもう一つのドラマが展開されていた。それは、現地の人々との形式ばらない、心温まる交流である。

1) 学校の先生方との交流

当然のことながら、これまで出会うことのなかった生身の人間と人間同士、「運動会の成功に向けて協力しよう」と掛け声だけではうまくいかない。筆者らは現地入りした初日にチョンカル小学校の関係者全員を招いて親睦夕食会を開いた。なんと家族を含め30名近い人々が参加してくれ、お互いに胸襟を開いた交流でフレンドシップを互いに太くした。



2) 地域の人々との交流

リハーサルの日、村の婦人方が学校の調理場を使って、学生ボランティアのために炊き出しをしてきていた(下の写真左)。聞くとところによると、学生ボランティアが校外の路地を清掃して回ったことと村の隅々に運動会開催を伝えるポスターを張り出していた姿に感動してのことだという。



また、運動会が終了して後片付けが終わった後、再び村の人々が「感謝のしるし」として伝統料理を振る舞ってくれた(上の写真中央)。そして最後には、カンボジアの伝統のダンスをみんなで輪になって踊った(上の写真右)。当初「村をあげての運動会」「地域が学校に結集するイメージ」をもって臨んだが、こうした交流と歓待を受け、所期の目的はおおむね達成されたとの感を強くした。

5. 次へとつながる二つの握手

今回の運動会プロジェクトは決して打ち上げ花火で終わらせてはいけない。そのことは当初よりプロジェクトのメンバーのすべてが肝に銘じていたことである。筆者は、カンボジアの地域に根差す体育(=カンボジア版生活体育)の普及と振興への基本方針として「⑤当面はチョンカル小学校の一点突破に徹し、そこからクラスターの各学校への面的な広がり効果を期待する」を挙げていた。この度のチョンカル小学校での大運動会は、第一にチョンカル小学校の校長先生はじめ教職員、子どもたち、そして地域の人々に運動会のもつ文化的価値=教育的価値を感得してもらうことがねらいであった。しかし同時に、この大運動会にチョンカル村の他の小・中学校の校長先生はじめ教育

行政の責任者に立ち会ってもらい、「おらが小学校でもやってみたい」「行政としてクラスター全域に広げていきたい」と感じてもらうことも大切なねらいであった。ここに二つの握手を載せておこう。下の写真左は、チョンカル小学校の校長先生と握手を交わしているもの、右の写真はチョンカル教育事務所の副所長さんと握手を交わしているものである。多くを語る必要はないであろう。



「感動しました。運動会をこれから先、チョンカル村の小中学校全体に広げていきたい」でもお手伝いさせていただき

「私たちはこれからも協力を惜しみません」と笑顔で返答した。

取り組みを振り返って

筆者は、2011年より山口大学教育学部の国際教育協力プロジェクトに加わり、学部のリソースを生かしながらカンボジアの教育振興への支援活動を進めてきた。しかしながら、2009年にカンボジアで本格実施となった体育科に関しては、現状はほとんど取り組まれていないにもかかわらず、どのような支援が可能なのかについて方向性を見出すことができない中、課題探索的調査として2年間、現地を訪問してきた。そしてようやくこの度、運動会にその可能性を託して実践を試みる段階にまで至った。取り組んでみて、確かな手ごたえに似たものを感じることができたという意味では、大きな一歩であったように思う。

また、この実践報告は執筆している筆者自身、感情移入の強い散文調に流れていることを自覚している。しかしそれは現地でその場に立ち会った者としてはやむを得ないとも感じている。なぜなら、それほどインパクトの強い活動であったからである。写真を多用したのも筆者自身の解釈をなるべく控えたいとする思いからであったが、3,000枚を超える写真と10時間を超える動画の中からここに載せた写真を選び、切り取ってくる作業それ自体に筆者の解釈が関与していることも避けがたかった。

ともあれ、この度の取り組みは山口大学教育研究後援財団、同国際協力活動推進プラットフォーム、さらには学長裁量経費および教育学部長裁量経費から本プロジェクトに対し活動費を助成いただいたことで実現できた。また、山口県下の個人・団体・企業、さらには全国の市民から、「カンボジアの子どもたちに」と、鉛筆・ノート・消しゴムなどの文房具、運動会に使用する赤白帽子等、多くの物品の寄付をいただいた。これらの寄付は、新聞・テレビ・ラジオなどメディアが本プロジェクトの取り組みを報じてくれたことによって一気に加速した。寄せられた物品は、現地の子どもたちに運動会への参加賞として直接手渡すことができた。多くの方々の善意に対し、心より感謝したい。

筆者はこの度のプロジェクトの取り組みを通じて新しい発見をすることができた。それは次のよ

うなことである。筆者らはカンボジアに「支援」活動に行ったのだが、その「支援」活動は実は多くの人々からの「支援」を受けて初めて実現できたことであり、一つの「支援」(＝学校体育の振興)は別の「支援」(＝運動用具・文房具等の寄付)があって成立すること、その別の「支援」もまたもう別の「支援」(＝メディアでの広報や SCN での呼びかけ)の上に成り立っていて、結局のところ、「支援」とは単体ではありえない、「支援」の連鎖であり、人と人の連鎖なのだというのである。この感覚は筆者にとって一番の収穫であった。このことを胸に刻みながら、2013年11月に予定のチョンカル村大運動会、バージョンアップした第2弾に向け、新たな取り組みを始めていきたいと考えている。

付記：ここに報告した「カンボジアの子どもたちに学校体育の素晴らしさを届けるプロジェクト」の取り組みは、山口大学教育学部国際教育協力プロジェクトの活動の一環であり、同時に山口大学(主管)、中村学園大学、近畿大学九州短期大学および西南学院大学の4大学共同のボランティア活動の成果である。

註および参考文献

- ・内田雄三・鈴木 聡(2008)「カンボジア体育」の明日への架け橋となって③、体育科教育. 56(6). p. 58-59.
- ・潮木守一(2007) 現場からみた国際教育協力. 国際教育協力論集. 10(3). p. 1-8.
- ・海野勇三(2011) カンボジアの子どもたちに学校体育を－私たちに何ができる？現地ではどんな支援が求められているのか？－. p. 24-34, 和泉研二、友定保博、海野勇三(2011年6月):カンボジア王国 SiemReap 州教員研修支援のモデル構築に関する研究 平成22年度 実施視察報告書. (<http://www.edu.yamaguchi-u.ac.jp/wp-content/uploads/2011/06/cambodia2.pdf>)
- ・海野勇三(2012) カンボジアの子どもたちに学校体育を(2)－現地が求める教育支援と私たちに可能な支援のマッチングを求めて－. p. 7-23, 和泉研二、海野勇三、佐伯里英子、田中大輔、林 秀晃、阿部弘和(2012年4月):カンボジア王国 SiemReap 州教員研修支援のモデル構築に関する研究 平成23年度 実施視察報告書(2). (<http://www.edu.yamaguchi-u.ac.jp/wp-content/uploads/2012/08/cambodia3.pdf>)
- ・楠 輝義(2010) 学校教育環境改善報告書 シェムリアップの教育 (製本版) p. 1-57. JICA・SV19年度第4次隊として、シェムリアップ州教育・青年・スポーツ局で支援活動に取り組んだ楠 輝義氏は、この中でシェムリアップ州の教育をめぐる現状と改革の現段階についてデータをもとに詳細に報告している。
- ・カンボジア学校体育スポーツ局(2007) 小学校保健体育科指導要領(日本語訳版). P. 1-68. なお本冊子は2011年12月に日本のNPO/NGOとして支援活動を続けている Hearts of Gold のプランペン事務所を訪問した際に頂いたものである。同時に学年別のシラバス(クメール語版)もいただいたが、残念ながら言語の壁でいまだ資料として使用できていない。
- ・Taku Yamaguchi(2010) New PE and Sport Education phase in Cambodia, The International Conference for the 30th Anniversary of the Japanese Society of Sport Education, PROCEEDINGS, p.48-54.
- ・松本格之祐・清水 由・木下光正(2008)「カンボジア体育」の明日への架け橋となって②、体

育科教育. 56(5). p. 54-55.

- ・村田敏雄 (2004) 日本の教育経験 国際協力研究 20(1). p. 7-16.
- ・山口 拓 (2012) カンボジアにおける教育政策に関する一考察：体育科教育の普及課題. 体育学研究. 57:297-313. この中で山口氏は、『乾季の日陰対策』と『雨季の水溜り対策』は、カンボジア各地の学校にとって生命線である」と述べている。
- ・山口 拓・岡出美則(2008)「カンボジア体育」の明日への架け橋となって①、体育科教育. 56(4). p. 64-65.

IV シェムリアップPTTCにおける保健教育の充実に向けて

山口大学教育学部保健体育選修 友定保博

はじめに

私のカンボジア訪問は、2011年3月以来2回目になる。今回、私たちは初めてPTTC（小学校教員養成校）の学生に対して理科の模擬授業と保健の模擬授業案づくりを実施した。

ジャイカHP (<http://www.jica.go.jp/index.html>) には「PTTC（小学校教員養成校）・RTTC（中学校教員養成校）研修に向けたNT研修実施報告（2010年9月11日）」が掲載されており、カンボジアでは各教科で「知識詰め込み型」の授業が行われていることが問題となっていること、生徒たちに考える力をつけさせる「探究型」の授業を増やすことが求められ、カンボジア全土の理科教員に「探求型授業」を導入し、普及に力を注ごうとNT（National Trainer）に対する研修が行われているようである。

これまで小学校の教員を対象に保健科の「けがの予防」や「救急処置」について講話・講習を行った経験からすると、子どもを教える立場で聞いているのではなく、自分たちの生活で直面する問題～たとえば、ムカデに咬まれたときにはどうすれば良いのかなどの質問が多く出され、健康・安全に関する知識の絶対量が教師にも不足している現状にある。理科では原理・原則を知るための実験を行うが、保健科の場合は病気やけがの予防をどうするか、栄養・運動・睡眠のとり方などの原理・原則は、毎日の生活のなかで効果の有無を実験されているようなものである。その意味では、小学校保健科での「探究型」授業とは、自分の身の回りの生活環境や健康・安全の現実・実態をとりあげ、それにゆさぶりをかけるような教材を工夫し、「よく知っていること（既知）から、知らなかったこと（未知）を発見する学習」が必要と、私は考えている。

こうした視点から、学習指導案の作成演習を説明し、PTTC教員による模擬授業を観察した。

PTTC教員による模擬授業

今回、初めてPTTC教員による授業を観察した。わが国の教員養成教育で言えば、教科教育法にあたる講義であり、1年生・2年生が45名程度参加し、教員によるモデル（模範）授業であった。1年次学生は児童役として教員の模擬授業を受け、2年次生は後方座席で授業を観察し記録を取る役を与えての参加であった。事前に全体の学習計画の説明を受けていないため、本時の後にどのような授業検討会が行われたのかは不明である。

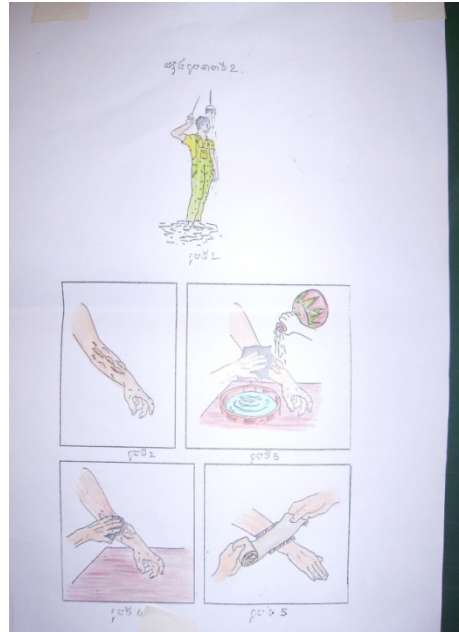
授業の題材はカンボジアのナショナルカリキュラム（小学校保健体育科指導要領 学校体育スポーツ局 2006 - 2007年）に基づけば、「けがの予防と回復」の領域の「やけど（火傷・熱傷）の処置」である。本授業は以下のように展開された。構成は以下のようである。

前時の復習 ○気持ちが悪くなるのはどんなときか
・ ・ 熱いものにさわったとき
○今日は何をならうのか
黒板にB4プリントを掲示
説明 やけどの原因となるもの
～やかん、車のマフラー、化学薬品、太陽・ ・





やけどの原因



やけどの手当

児童役の学生を3グループ（軽いやけど、重いやけど、手当て）に分けて話し合わせたが、何を考えさせようとしたのかは、通訳の言葉では理解できなかった。

その後、結果を各グループに発表させた。軽いやけどの手当てグループは、水の入った洗面器にやけどをした部分をつけ、濡れた布（ガーゼ？）を患部にあてる示範を披露した。いずれも発表後に、全員に対して「これでいいですか？」という確認を求めているようである。

「やけどの原因」の写真の矢印部分は、体表面積のうち、何%がやけどを負っているのか計算する図表である。熱傷の面積が広いほど重傷となる。簡便な計算方法の一つに9の法則というのがあり、頭が9%、身体の前面が9の2倍の18%、後面も同様18%、片上肢9%の両方で18%、下肢は片方で18% 両方で36%というように計算する。なお、幼児・小児の場合は、頭の部分をより大きく評価した5の法則を用いるが、これらの詳しい説明があったのか？通訳からの話は聞かなかった。

やけどの程度は受傷面積とその深さによって決まる。（目安は人の手のひら1つ分が約1%）成人では受傷面積が体表面積の40%以上で生命の危機、20%以上でショックをおこす危険があり、乳幼児や老人では30%以上で生命の危機、10%以上でショックをおこす恐れがある。最低限、こうした専門知識は教えておく必要がある。



話し合い活動



グループ発表



P T T C 教員による初めての授業観察だったが、詳細については通訳の言葉にも理解できないことが多く、報告できない。授業をビデオ撮影し、正確な発言を記録に起こし、授業者と一緒に気になる場面ストップしながら検討する必要がある。

また本授業の前にどのような学習が行われたのか、そして後でどのような学習を行う予定なのか、単元計画レベルでみておくこと、そして機会があれば、P T T C での教員養成教育の全貌を見て改善方向を考える必要性を強く感じたことである。

小学校保健の「けがの防止」学習指導案の作成について（講義・演習）

今回、シェムリアップ P T T C において、小学校保健の学習指導案を作成するために必要な手順について理解し、教員や学生に授業をつくるイメージと意欲をもってもらいたいと考えた。

日本の学校保健は保健教育と保健管理を柱に構成されている。1900 年前後には学校医制度や日常の学校生活を健康に過ごすため学校健康診断の実施、安心・安全に過ごせる学校環境衛生基準などが整備された。こうした医療管理制度のもとで、その時々の子どもの疾病や健康課題に応じて保健指導が行われてきた。つまり保健管理に伴う保健指導である。その後、学校に常駐する職員として養護教諭が増え、現在では教育職員として重要な役割を果たしている。体育・保健体育の教科で、保健教育が行われようになったのは戦後（1949 年以降）のことである。

カンボジアにおいてはこうした学校保健管理がほとんど行われていない現状である。保健教育が「食べられない人の料理の本であってはならない」。その意味では、子どもたちの医療・健康管理体制の整備を進めるなかで教育の意義も大きくなる。

※使用した PowerPoint 講義資料

「けがの予防」の学習指導案を作成しましょう！！

តូម៉ូសាដា 友定保博
2012. 11. 16

第1段階 「本時のねらい」を考える

保健科の領域構成案
Nation Religion king (2007)

1. 健康な日常生活
2. 身体の成長と発達
3. けがや事故の予防
4. 疾病予防と回復
5. 薬物対策
6. 心の健康

けがや事故の原因を理解し、その予防および対応に関する知識を高める。

第2段階 導入教材
子どもの経験している内容をとりあげる

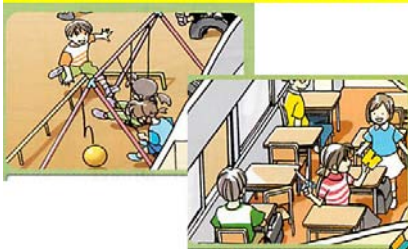
- (A) けがや事故の体験を思い出してみよう
→ どんな時に、どんなけがや事故をしたか
→ その時、どんな思いをしましたか
- (B) 学校生活でのけがや事故の事例
- (C) 交通事故や水の事故の事例



① 学校でのけがを防ごう

やってみよう
どのようなことに気をつければ、学校でのけがを防ぐことができるのでしょうか。下の3つの場面について考え、書いてみましょう。

第3段階 学習の展開！ けがや事故の原因を考え、危険性を予測する



意見を聞いて、板書する

けが・事故

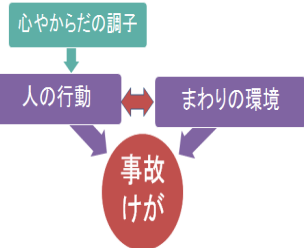
人の行動	危険な環境

危険性を予測する学習活動に学生たちは興味を示し、前に出て自分の意見を述べてくれた。

実際には、意見を聞いて「人の行動」と「危険な環境」に分けて板書していき、けがの原因の考え方を理解させることをねらいとしている。通訳付きのため、時間不足で板書は省略した。



第3段階 学習の展開Ⅱ
けがや事故はなぜ起こるかを理解する



第4段階 学習の整理
けがや事故は、なぜ起こるか
けがを防ぐためには、どうすればよいか

☆けがや事故は人の**行動**とまわりの**環境**が原因で起こります。そして人の行動は、その人の**こころ**の状態や**体**の調子と関係しています。

☆けがを防ぐためには、**ルール**を守るとともに、**危険**に早く気づき、正しい判断をして、安全な**行動**をとることが大切です。また、**環境**を安全に整えておくことも大切です。

けがの原因は心にもあります	からだの調子が原因
・不安や心配ごと～集中力がなくなる	・すいみん不足
・心のみだれ～危険を予知できなくなる	・つかれ～からだが思うように動かない
・悪ふざけ～まわりの人のことを考えない	・栄養不足
・ルールを守らない	・かたいからだ～危険から身を守る反射

まず、事故やけがの原因は人の行動とまわりの環境との関係でとらえること。その上で、人の行動は結果であり、そうした行動をとらせる原因は心の状態や体の調子と関係していることに気付かせる。

最後に、応用問題として交通事故の危険予知学習を行った。手前の自転車のハンドルを握っているのが自分だとしたら、この先に行くとき、どんな危険があると思いますか？という質問に対して、まず左側を走っている。そう、カンボジアは右側通行であった。次に、自転車にブレーキがないと指摘。確かに手に隠れてブレーキは見えない。日本の教材をそのまま使った失敗例である。しかし、一旦停止の標識はともかく、大きな通りに出るときには左から車が来るかもしれないなどの発言はみられなかった。

危険予測の学習法



小学校においても子どもたちの通学手段として自転車が使用されている。車が増え、舗装道路が整備されていくと、日本の1960年代がそうだったように、歩行者や自転車乗用者の事故は増えてくる。



チョンカル小学校の自転車置場



ワットボー小学校の自転車置場

カンボジアの首都プノンペンでは、ジャイカHPによると、車両の増加に伴う交通事故が増え、2012年3月より2年計画でプノンペン市都市交通計画プロジェクトが進行しているようである。前回訪問時において、シムリアップ市街地を走る自転車・トクトク・3人乗りのオートバイそれに乗用車や観光バスなどの交通状況を見て予感したことは現実になろうとしている。

2011年3月訪問時に比べて、2012年11月のシムリアップ市街地には交通信号の設置箇所が増え、横断歩道の標示も目立っていた。



また、タイとの国境近くのチョンカル村までの道路も舗装されており、チョンカル小学校付近の国道には、日本で言えば「学童横断注意」の標識が何か所かに設置されていた。まだ交通標識や標示を意識しているようには見えなかったが・・・日本のような「交通戦争」と呼ばれた時代はスルーできるように、交通環境整備と事故防止教育の充実に寄与できるよう努力したい、と考えている。



V 小学校教員を対象とした学校保健講習会の実施

附属教育実践総合センター 客員准教授 佐伯里英子

1. 昨年度からの経緯

昨年度、ワットポー小学校で教員を対象に講習を実施した。その内容は、現地でカウンターパートのような役割を果たしてくださっている田中千草さんの情報をもとに、次のようなものだった。

- (1) 子どもの病気やけがの見極め方や対処について
- (2) 病気予防のための手洗いについて
- (3) 虫歯予防の必要性和歯磨きの方法について
- (4) 視力検査について
- (5) 日本の保健室の様子について
- (6) 初経指導について

昨年度の課題として、初経指導が難しいということがあった。男女が同席しているところでは、例え教員であっても月経の話をしたり、聞いたりすることに抵抗があるようだった。田中さんの養子の女の子に初経があったとき、学校で全く指導を受けていないことに気づかされたとのことだった。

今回の講習内容の希望について、けがの処置等はかなり出来るようになってきている。心肺蘇生や止血法などの学習は大切だが、カンボジアの人たちの習慣から見て、あまり使うことはないだろう。したがって、昨年の講習で課題と感じていた初経教育や男女の違い、人の体の仕組み等について講習をお願いしたいということだった。

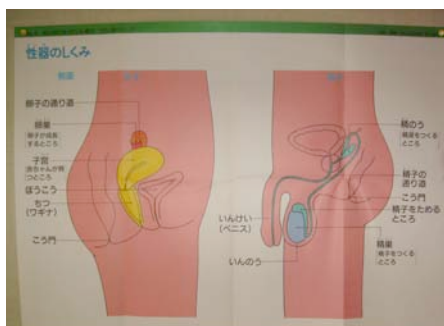
2. 本年度の講習内容

- (1) なぜ初経教育（性教育）が必要か
- (2) 初経、精通という体の変化がなぜ起こるのか
- (3) 月経について
- (4) 精通について
- (5) 受精の成立
- (6) 実習 三角巾の使い方



日本の小学校の教科書に準拠した保健教材として作られている、大判の生殖器の絵を使って説明した。事前にワットポーの先生方が講習内容の希望を話し合ってくださっていたので、昨年感じた恥ずかしそうな雰囲気はなく、真剣に聞いていただいた。講習後の質問では、子どもへの指導の仕方についてではなく、意外にも、男女の産み分けが出来

るのか等、教師自身の問題として気になっていることが多かった。終わりに三角巾の使い方についての実習を取り入れた。初めての三角巾であったこと、ずっと座ったままで聞いていたことから、実習は非常に楽しそうに取り組んでいた。



3. 講習に関する課題

子どもたちへどう指導するかといった説明形式ですすめたが、性や身体に関する内容であったこともあり実際は、子どもへの指導というより、教師が自分自身のこととして受け止めている傾向があった。



この翌日、教員養成校 (PTTC) の学生を対象に鎌田先生が模擬授業をされた。実験があったこともあるが、学生達が実に生き生きと意欲的に参加していた。PTTCの先生も、模擬授業に非常に興味を示された。ワットボーの先生方にも、模擬授業形式ですすめるのがより有効ではないかと考えられる。ワットボー小学校の授業を多く参観したが、教師が教卓に座ったままで、自習をしているようなクラスがいくつかあった。また、教室の前に立って黒板を使いながら授業している教師もいたが、40～50年以上前の日本の教室風景に似ていると感じた。どのように指導方法や教材教具を工夫し、子どもたちに分かる授業をすればよいのか、分からない教師が多いのではないかと感じている。教師の社会的立場や給与面の保障が低いことも一因かもしれない。このことから、今後また機会が与えられるのであれば、子どもが楽しく学び、よく分かる授業を再現するような模擬授業を展開したい。

4. 保健室の変化

昨年物置状態だった保健室は、清潔に整理され、ベッドにも真っ白いシートが敷いてあった。昨年、日本から養護教諭の訪問があり、整備をしてもらったとのことだった。また、専任の職員が2人（午前と午後交替）配属しており、入り口に2人の写真が貼ってあった。



5. 健康診断の実施

ワットポー小学校では子どもの健康診断を始めたという報告があった。ちょうど訪問日に保健室の前に子ども達が行列を作っていた。日本のような詳しいものではなく、身体計測にとどまっているが、大きな前進だと思う。

6. チョンカル村の現状

今回シェムリアップから北西約80kmのチョンカル村を訪問した。

都市部のシェムリアップに比べ生活環境、学習環境は非常に厳しい。学校に通っていない子どもも多いと聞いた。また、ゴミをまとめて処分する習慣がなく、家の中も整理整頓されていないため、衛生状態は決して良くない。



学校での子どもたちは、教科書等満足にない中、まじめに教師の話を聞き、元気に学校生活を送っていた。昼食を提供するこの学校では、壁のない教室の後ろに大釜が



二つある。屋内教室の一角には援助米が保管してあった。飲料水については、学校内で一番きれいな建物である図書館の入り口にボトルとコップが置いてある。ワットボーのように各自がペットボトルを持ってくることはない。生活用水については大きなタンクが雨樋の下にあり、これに雨水を溜めて使っている。水道設備はない。



雨水が溜まるようになっている

我々は、チョンカル村の訪問で近くのホテルに一泊した。翌朝ホテルの前庭にある食堂で朝食をとっていると、田舎にしては派手な出で立ちの若い女性2人と中年男性が出てきてお金のやりとりをしていた。売買春と思われる。ワットボー小学校でも、母親が売春の仕事で生計を立てている母子家庭もあると聞いた。また、カンボジア人の通訳の方は、貧しい地域の女性は早く結婚し、出産に伴うトラブルが多いと話された。

男女とも自分や相手の身体や性について、早い時期に、しっかりと学ぶ必要があると痛感した。

7. 今後の課題について

ワットボー小学校では、校長先生の積極的な姿勢と田中先生のサポートで、子どもの健康管理についての意識は高まってきていると感じた。子どもたちへの保健指導については、田中先生によるとエイズ等感染症について教えている教師もいるようだが、まだ、充実しているとは言い難い。

P T T Cで教員が学生に「火傷の手当」について指導しているところを参観した。黒板に、後ろからは見えないような小さな資料を貼り、それをもとに、前で2、3人が手当法を実習していた。後ろの席の学生には見えないようだった。短い参観時間なので

べては分からないが、この時間に限ると、火傷の手当についてきちんと学ぶことができたのか疑問に感じた。教師たちが教授法について、どのくらい学んで現場に出るのかよく分からないが、子どもたちが（PTTCで火傷についての授業）健康に生きていく上で力になる、知識や知恵や技がしっかりと身につくような授業の方法を伝える余地はあると思う。そのために、今後は模擬授業の形式で講習することが有効ではないかと思う。ワットボー小学校でこのような関わりを続けていくことで、周辺の学校にも、子どもの健康管理や保健指導への理解が広まっていくことが期待出来る。ワットボー小学校に関わり続けることの意味はここにあると思う。



また、今回は新たにチョンカル村の学校を訪問した。この地区の学校では、最初から本プロジェクトのメンバーである海野教授を中心に、4大学の学生が運動会づくりに取り組んだ。我々の今回の訪問は、その事前調査と事前打ち合わせの意味もあった。2ヶ月後に運動会は行われた。健康、衛生面で厳しい環境で生活している子どもたちだが、地域の学校や住民の方々を巻き込んだ運動会は、子どもも大人も本当に楽しみ、仲間と共に体を動かし競うことのおもしろさや心地よさを味わったようだった。

運動会を楽しむ活動の中で、けがの予防や手当、自分の体を大切にすること等、現地の暮らしの中で必要な学びを、どこかで仕組むことは出来ないかと考えている。



(友定教授が持参した長縄に大喜びのチョンカルの子ども)

VI カンボジアにおける支援活動についての考察 ～現地での授業実践及び校内報告会を通して～
山口大学教育学部附属光小学校 教諭 鎌田潤一

1 はじめに

この度、山口大学教育学部で組織する「教育国際支援プロジェクト」に参加させていただき、カンボジアの小学校やPTTC（教員養成学校）において支援活動を行った。それまでの当国に対する筆者の認識は、アンコール遺跡群の他は、内戦、難民、地雷、貧困などといった暗いイメージのものしかなかった。しかし、現地で出会った子どもたちは活力に満ちていて、適切な教育を受けることができれば、近い将来に国家の建て直しが図られるのではないかと感じている。

この報告書をつくる機会に、再度支援活動の在り方について考えてみたい。「カンボジアの教育に何が必要なのか」、「日本の子どもたちに何を伝えなければならないか」など、現地を訪れることで意識するようになった問題の答えを、少しでも見出せればと願っている。

2 支援活動の実際

筆者が主に担当したのは、シェムリアップ市にあるワット・ボー（Wat Boo）小学校5年生とPTTCの学生を対象にした理科の授業である。

(1) ワット・ボー小学校での活動（11月15日）

ア 本時の授業の概要

日本では、第3学年で扱う「空気と水の性質」を行った。空気鉄砲の筒の中に、空気を入れた場合と水を入れた場合の玉の飛び方を比較させ、玉の飛び方の違いが、空気と水の性質（体積変化が起こるか否か）に起因していることをとらえるようにするのがねらいである。

授業の流れは、以下のとおりである。

①空気鉄砲を使って玉を飛ばす（図1）

空気鉄砲は、日本から持参した筒がアクリル製（透明）のものである。後玉が押されてから前玉が飛び出すまでの位置関係から、空気の体積変化に気付くことができるようにした。

②筒の中に水を入れた時、玉は飛ぶかどうか予想し確かめる（図2）

予想の根拠について話し合わせることで、目的意識をもって実験に取り組み、空気と水の重さ以外の違いに着目できるようにした。

③空気と水の性質の違いをまとめる



図1 空気玉を飛ばす様子



図2 水玉を飛ばす様子

イ 児童の様子

通訳の話によると、カンボジアにも竹筒に木の実を込めて飛ばす遊びはあり、授業の様子からも、玉が飛ぶのは空気の押し返す力によるものであることを知っているようである。しかし、筒の中に水を入れる経験はなく、予想の段階では玉が飛ぶかどうか困惑していた。

筒の中に水を入れて玉を飛ばす実験では、図2の左側のように代表5人に玉を飛ばさせ、残りの児童は右側のように玉が飛ぶと予想する位置に移動させた。飛ばないと予想していた児童も期待感をもったのか、空気の時よりも遠くに離れている。結果は、真下に玉が落ちるといふ大方の予想に反するものであったが、初めて見る光景に歓声と拍手がわき上がった(図3)。

実験後に、空気は押し縮められるから押し返す力が生まれるが、水は押し縮めることができないので玉を飛ばす力が生れないことを説明した。通訳を介してどこまで理解してもらえたかは定かではないが、実際に確かめてみるという理科の面白さは感じてもらったと思う。

本時の授業とは別に、日本の四季を紹介するために、本校周辺の季節ごとの写真を提示した。紅葉や落葉した木々を見るのは初めのように、授業後にプレゼントした紅葉のしおり(筆者のクラスの児童が作ったもの)を物珍しそうに眺めていた(図4)。



図3 実験結果に喜ぶ児童



図4 初めて紅葉を見た様子

(2) PTTCでの活動(11月16日)

ア 本時の授業の概要

日本では第5学年で扱う「振り子の運動」に、高校レベルの内容を加えたものを行った。錘や糸の長さを変えながら振り子の周期を計測し、表やグラフにまとめさせることで、振り子の長さや周期の関係をとらえるようにするのがねらいである。

授業の流れは、以下のとおりである。

①振り子の長さを変えて周期を計測する

10gの錘の中心から、5cm、10cm、…、25cmと目盛りを打った糸を使い、振り子の長さ毎の周期を調べ(図5)表にまとめさせた(表1)。この活動により、学生は振り子の長さを25cmにすると『1秒振り子』(周期が1秒)ができることを確認している。

②『2秒振り子』の長さを予想し確かめる

表1の数字の並びに着目させることで、『2秒振り子』の長さを予想できるようにした。

③実験結果をグラフにまとめる



図5 実験の様子

表1をグラフにすると、図6の曲線になる。これでは、『2秒振り子』の長さを求められないため、周期を二乗するとグラフが直線になることを教えた。実際にグラフを作成させることで、『2秒振り子』の長さをグラフから求めることができるようにした。

表1 糸の長さとの関係

糸の長さ (cm)	5	10	15	20	25	50	100
周期 (秒)	0.45	0.63	0.78	0.92	1.00		

※表の数値は計算によるもの

※糸の長さが50cmの時の周期は1.42秒、100cmの時の周期は2.01秒

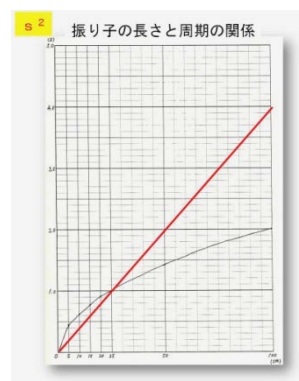


図6 実験結果のグラフ

イ 学生の様子

導入で、長さ2m強（『3秒振り子』）の糸に吊るしたかごに、水で満たしたペットボトルを載せて揺らすと、2Lと350mLでは、どちらが速く揺れるかを問うた。「重い方」、「軽い方」と予想は分かれたが、「同じ」と正解を答える学生はいなかった。実際にやって見せることで、違う重さのペットボトルを載せても、1往復する時間（10往復の時間を計測し10で割る）は誤差程度の違いしかないことを確認させると、皆が驚いた様子であった。

実験では、学生は生き生きとした表情をしていたのが印象的であった。当初学生20人の参加と聞いていたので、5グループ分の実験道具しか用意していなかったが、飛び入り参加が多数あったため1グループ10人前後に膨れ上がった。それにもかかわらず、協力し合いながら実験を行っていた。初めての実験にも関わらず、手際もよい。

グラフ用紙もグループに1枚しか用意していなかった。筆者が黒板に描いて見せるのを参考に（図7）、グラフ用紙に描く者と、アドバイスをする者、板書を自分のノートに写す者などがいて、それぞれの目が真剣であった（図8）。

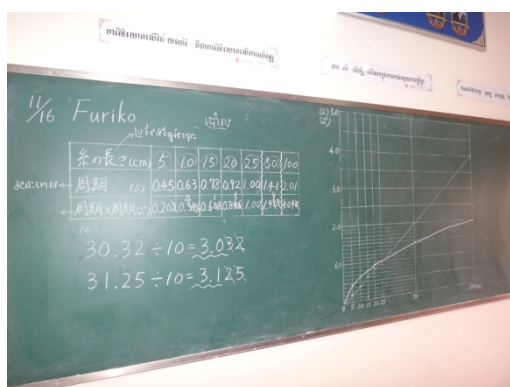


図7 本時の板書



図8 グループの様子

(3) カンボジアにおける教育の問題

授業実践や学校視察、現地の人のお話などを通して、筆者の感じるカンボジアの教育の問題を整理してみる。あくまでも主観によるものであり、短い滞在時間と筆者の認識不足などから、実際と違うことがあるかもしれないことをあらかじめ断っておく。

ア 学習環境の問題

ワット・ポー小学校（図9）に到着して、まず驚いたのが子どもの多さである。全校児童5000人以上、午前と午後の二部制であるため実際にはその半数とはいえ、現在の日本では考えられない多さである。校舎が連なっているにもかかわらず、どの1クラス60人前後である（図10）。

地方に行くと、複式学級もあるなど学校の規模は小さくなる。外国からの支援により新しい校舎の学校もあるが、中には木造で屋根しかない校舎も見られた（図11）。



図9 ワット・ポー小学校



図10 クラスの人数



図11 地方の小学校の授業風景

PTTCも外国からの支援が多く受けていて、筆者が授業を行った校舎（クーラー付き）は日本が支援したものである。理科準備室の棚には、各国から送られた物資が収納されているが、文房具や消耗品が多く、ビーカーや試験管、薬品などの実験に必要な道具はない。

PTTCでの授業後、当校の教師に、「ストップウォッチや電卓、グラフ用紙はこの学校にはないので寄贈してほしい」と言われた。学生や現地の人たちの様子を見てみると、腕時計や携帯電話を持っているし、ホテルにはパソコンもあったので本当かと疑いもしたが、確かに理科準備室の棚にはなかった。また、このことから、理科の授業ですら教科書のみで行われていることがうかがえた。

イ 授業の質の問題

どの学校の授業を覗いても、教師主導型の一斉授業が行われていた。中には指名された児童が黒板に解答を書く場面も見られたが、児童や学生はほとんど席に着いたままである。

また、子どもは、授業の開始や終了時だけでなく、指名された時も礼を述べるなど、教師を大変敬っているように見える。通訳の話によると、内戦中は、知識人虐殺の命令により、子どもが教師を捕らえ、軍に突き出していたそうだ。苦い歴史を繰り返さないためにも必要なことだと、「学習規律」という言葉を交えながら通訳は教えてくれた。

ただ、規律も大切ではあるが、筆者の行った空気鉄砲や振り子の実験での様子を見ると、活動の中から学ぶ経験も必要であることを改めて感じた。設備や備品、教材の不備など、授業改善のために教師が努力しなければならない面も多々あるが、現状では読み書き程度のスキルしか身に付かず、学ぶ意欲が育まれないのではないかを考える。学校に行かなくなった子どもの理由に、「授業がおもしろくないから」があることも、通訳は教えてくれた。

ウ 教師の現実

教師ばかりを責めるわけにはいかない。生活できるほどの給料はもらえず、ほとんどが勤務終了後、児童をかき分けるようにしてバイクで次の職場に向かっている（図12）。このような教師にとって、学校での仕事は副業であるとも聞いている。仕事は全て勤務時間内に済ませるため、授業中、子どもを放って丸付けをしている光景も見られた。

昨年度、本プロジェクトで、子どもたちのためにボールを大量に支給した学校には、現在1個も残っていなかった。そもそも、そのような道具を使って遊んでいる光景は、どこへ行っても見たことがない。この学校に限らず、支援された物資は、マーケットに売りに出されてしまい、子どもたちの手に届かないそうだ。学校や教師たちの「もらい癖」が常習化され、教育がないがしろになっているのではと懸念している。



図12 次の職場に向かう教師

3 本校における広報活動

12月14日に、本校の全校集会においてカンボジア支援活動の報告会を行った（図13）。話の構成は、カンボジアの紹介から、人々の生活、ワット・ポー小学校とPTTCでの授業、カンボジアの問題の順とし、写真やビデオ映像を使って児童にも分かりやすくなるように努めた。

筆者が最も伝えたかったのは、未だに人身売買が行われているという、子どもたちを取り巻く現実である。まず、カンボジア北部（タイとの国境付近）で滞在したホテルの前にあった、幼い女兒が写った看板を紹介した。“PLEASE PROTECT OUR NATIONAL TREASURES.”と、切実な願いが書かれている。次に、ワット・ポー小学校で校長補佐を務めている、田中千草先生を紹介した。田中先生は、家庭の事情で不幸な目に遭っている子どもたちを引き取り、我が子として育てている。

児童が理解できたかは自信がないが、最後に文房具の寄付を募ると大量の鉛筆やノートなどが集まった。これらの文房具は、1月にチョンカル小学校で行われた運動会の参加賞として、子どもたちに手渡された。ささやかかもしれないが、支援の輪が確実に広がっているのである。



図13 報告会の様子



図14 道端にある看板



図15 田中先生の家族

4 今後の支援活動についての私案

1週間程度の身近い滞在であったが、そこで感じたことをもとに、筆者が思い描いているカンボジアへのより有効な支援策を述べる。

(1) 授業の質を上げるために

授業構成や活動の仕組み方などについての手法をカンボジアに広めるためには、PTTCにおける支援活動に重点を置くのがよいと考える。ここの学生は、将来への希望と意欲に満ちている。それに加えて、学生自身が、これまで教科書をなぞるような授業しか経験していないので、活動を仕組む意義について理解し実践に移そうとするはずである。

筆者のような担任をもっている教員がPTTCに出向く場合、1週間もクラスを空けるのは心苦しく費用もかかる。時期は、PTTCの都合が合えば、日本の夏休み、または冬休みが行きやすい。また、集中講義の形をとれば、現地滞在は2日間で、行き帰りの2日間で合わせて4日間で済むと思う。講義の合間に、小学校を訪問するのもよい。

理科の実験に使う道具も、現地で調達できるものがよい。マーケットやスーパーなどを調査すると、ストップウォッチ付きの時計や電卓（図16）があることを確認した。その他、磁石、虫眼鏡、振り子やてこの実験で代用できそうな釣り用の錘などもあった。薬局もあるので、デンプンを検出するためのヨウ素液も手に入ると思う。

入手が困難なのは、塩酸や水酸化ナトリウム、リトマス紙などの試薬である。酸とアルカリを学習する際は、レモン汁や灰汁などが使える。マーケットでムラサキキャベツ（図18）を見つけたので、その煮汁を使えば指示薬として代用できる。こうすれば、生活に密着した学習が仕組めるが、金属を溶かすほどの強酸性、強アルカリ性の学習は、教科書に頼るしかないであろう。



図16 マーケットで見つけた電卓



図17 電気に関する単元で
使えそうな商品



図18 マーケットで見つけた
ムラサキキャベツ

(2) 広報活動について

本校で報告会を行って感じたことは、自分の認識不足が誤解を生んでしまうのではないかと不安である。見たこと、感じたことは事実として伝えることができるが、歴史的背景については、様々な書籍を目に通し、客観的にとらえられる必要がある。ただ、カンボジアについての書籍は、それほど出回っていないと思われる。

また、本校での報告会を通して、支援には短期的なものと長期的なものがあるのではないかと考える。運動会の参加賞として、文房具を送るなどの活動は前者で、今後も支援をする国の動向に関心をもち続けることが後者である。「カンボジアのことがテレビに出ていたよ。」と、子どもたちが教えてくれるたびに、このような子どもを増やすためにも、現状を伝えていかなければならないと感じている。

5 おわりに

今回のカンボジア訪問は、教育における支援の在り方について考える貴重な体験となった。日本も、カンボジアも、子どもたちは純粋に「知りたい」という気持ち（もっと言えば本能）をもっていて、それをかなえるための手だてを教師が教示しなければならない。内戦による教育の遅れを、自国の人たちの手によって取り戻すことができるように、微々たるものではあるが、これからも支援を続けていきたい。

Ⅶ おわりに ～次年度への展望～

山口大学教育学部理科教育選修 教授 和泉研二

本年度のプロジェクトでは、活動の内容を3つの支援と3つの拠点に焦点化して、以下を実施した。

(1) 教員養成支援（於、PTTC）

- ・理科示師授業（担当：鎌田、対象：学生および教員）
- ・学校安全講習会（担当：友定、対象：学生および教員）

(2) 現職教員支援（於、ワット・ポー小学校）

- ・理科示師授業（担当：鎌田、対象：児童および教員）
- ・学校保健講習会（担当：佐伯、対象：教員）

(3) 拠点校構築調査および打合せ（於、チョンカル小学校及びクラスター）

- ・チョンカル小学校及びクラスター校調査（担当：全員）
- ・運動会打合せ及び事前調査（担当：海野、入江）

(4) 報告会の実施（於、教育学部（理科ちゃぶ）、附属光小学校）

- ・「理科ちゃぶ」研修会での報告（担当：和泉、海野）
- ・附属光小学校での報告（担当：鎌田）

これらの活動を通して、昨年度に引き続き、現職の小学校教員と学生が参加しながら、初めて PTTC での示師授業および研修会を実施できた。帰国後、教育学部および附属光小学校で実施した報告会では、学生および児童の国際貢献・国際理解に対する興味関心や意識を高める効果が見られた。また、山口大学独自のあらたな拠点校を開拓し、運動会の実施に導くことができたことも、本年度のプロジェクトの大きな成果であった。

多くの学生が情熱に燃えて、自主的に計画・運営し、しかも自費で出かけていって大成功を納めたチョンカル小学校での運動会は、本プロジェクトの次年度の活動計画を考える上でも、大変参考になる。カンボジアで重視している理科教育を考えた場合、山口大学でも、理学部が主催し、教育学部からも学生が参加して実施されている科学の祭典「サイエンス ワールド」を行っている。「サイエンス ワールド イン カンボジア」を PTTC の学生とともに立ち上げることを検討する価値はあるであろう。PTTC の教員および学生にノウハウをマスターしてもらい、近い将来 PTTC の学生が自主的に「サイエンス ワールド」を企画し運営し、附属小学校をはじめとする近隣の子どもたちを招待するといった活動ができるようになれば、教員養成支援としても、小学生への教育効果としても、意義は大きいと考える。平成25年度に向けて検討を進めたい。

謝 辞

本プロジェクトは、『国際協力活動推進プラットフォーム』および山口大学教育学部学部長裁量経費（平成24年度）からの資金援助によって実施した。実施に際し、終始励ましと適切なお助言を頂いた『国際協力活動推進プラットフォーム』代表の富本幾文教授（山口大学経済学部）、退職された元代表の今津武先生、現地調査の計画および実現にご支援頂いた石井由理教育学部教授、古賀和利学部長に感謝致します。

現地では、ワット・ボー小学校のブン・キムチェン校長、田中千種校長補佐、シェムリアップ初等教育教員養成学校の Leav Ora 校長、チョンカル小学校および近隣の小学校の校長や教育関係をはじめ、多くの方々からご協力、ご援助を得ました。皆様に深く感謝申し上げます。また、U. K. Vichidh 氏には、現地での活動を全般にわたり支えて頂きました。

最後になりましたが、教育学部有志の会の立ち上げに尽力され、本活動の道筋をつけて頂いた阿部和弘元教育学部教授には、引き続き貴重なご助言・ご指導を賜っております。あらためて心より感謝致します。

報告会に関する参考資料

平成 24 年度 山口大学教育学部 理科ちゃぶ研修会

理科教育最新事情：授業実践と社会貢献 ～ICT を活用した理科教育と啓蒙活動の新たな展開～

開催要項

1. 趣旨

ICT を利用した学習活動には、教員と児童生徒ならびに児童生徒どうしの間での双方向性を高め、児童生徒の主体性、意欲・関心や知識・理解を高めるなどの効果が期待される。ICT を利用した教育活動としては、総務省の「フューチャースクール推進事業」や文部科学省の「学びのイノベーション事業」などの実証研究が実施されている。

本研修会では、全国的な ICT 活用の状況や授業での効果的な活用法について理解を深めることにより、ICT 活用による理科教育力の向上を図るとともに、これからの理科教育における ICT 活用の在り方を探る。また、理科に携わるものが実施する社会貢献活動として、附属光小学校との連携により実施した「理科授業づくりの会」、理学部との連携により実施した「サイエンスワールド」、国際協カプラットフォームとの連携で実施した「カンボジア理科教育支援活動」を報告するとともに、今後の貢献の在り方を展望する。

2. 主催：山口大学教育学部

3. 共催：山口県教育委員会

4. 開催日時：平成 24 年 12 月 22 日（土） 13：30～17：30

5. 開催場所：山口大学教育学部 21 番教室（山口市吉田 1677-1）

6. 参加者：教員志望学生、小・中学校教員、大学教員、教育委員会・教育機関関係者など

7. 参加費：無料

8. 内容等：

開会行事（13:30～13:35）

主催者挨拶

教育学部長

古賀和利

第 I 部：ICT を活用した理科授業の現状と今後の展望

1) 講演 I（13:35～14:45）

「フューチャースクール推進校での理科授業～ICTは何をどのように問題提起したか～」
徳島県東みよし町立足代小学校教諭 中川斉史

2) 講演 II（15:00～16:00）

「学校教育における ICT 活用の全国的な状況と今後の展望」

（株）ラティオインターナショナル 井口唯史

第 II 部：理科で行う社会貢献の現状と今後の展望（16:15～17:20）

（ちゃぶ台理科ネット活動報告）

1) 「理科授業づくりの会」を実施して

教育学部附属光小学校教諭

河村美成

2) サイエンスワールドに参加して

教育学部 4 年

三奈木彰人

3) カンボジア教育支援の現状と展望 ～理科と保健体育の支援を通して～

教育学部保健体育選修教授

海野勇三

教育学部理科教育選修教授

和泉研二

講評（17:20～17:25）

山口県教育庁義務教育課指導主事

福江功至

閉会行事（17:25～17:30）

教育学部副学部長

村上清文

司会進行：和泉研二

9. 参加申し込み方法

申込方法：本事業のメールアドレス（rika-gp-ed@ml.cc.yamaguchi-u.ac.jp）宛に、件名を「理科ちゃぶ研修会申し込み」とし、本文に「氏名」、「所属」、「連絡先」を 12 月 19 日（水）までにお申し込み下さい。また、不明な点についてのお問い合わせも、上記メールアドレス宛にお願いします。

平成 24 年度 山口大学教育学部 理科ちゃぶ研修会

理科教育最新事情：授業実践と社会貢献

～ ICT を活用した理科教育と啓蒙活動の新たな展開 ～

趣旨：ICT を利用した学習活動には、教員と児童生徒ならびに児童生徒どうしの間での双方向性を高め、児童生徒の主体性、意欲・関心や知識・理解を高めるなどの効果が期待される。ICT を利用した教育活動としては、総務省の「フューチャースクール推進事業」や文部科学省の「学びのイノベーション事業」などの実証研究が実施されている。本研修会では、全国的な ICT 活用の状況や授業での効果的な活用法について理解を深めることにより、ICT 活用による理科教育力の向上を図るとともに、これからの理科教育における ICT 活用の在り方を探る。また、理科に携わるものが実施する社会貢献活動として、附属光小学校との連携により実施した「理科授業づくりの会」、理学部との連携により実施した「サイエンスワールド」、国際協力プラットフォームとの連携で実施した「カンボジア理科教育支援活動」を報告するとともに、今後の貢献の在り方を展望する。

開催日時：平成 24 年 12 月 22 日（土）13：30～17：30

開催場所：山口大学教育学部 21 番教室

参加費：無料

第 I 部：ICT を活用した理科授業の現状と今後の展望（講演）

フューチャースクール推進校での理科授業

～ ICT は何をどのように問題提起したか～

徳島県東みよし町立足代小学校教諭 中川 斉史 (13：35～14：45)

学校教育における ICT 活用の全国的な状況と今後の展望

(株) ラディオインターナショナル 井口 唯史 (15：00～16：00)

第 II 部：理科で行う社会貢献の現状と今後の展望（ちゃぶ台理科ネット活動報告）

- | | | |
|-------------------------------------|--------------|-------|
| 1) 「理科授業づくりの会」を実施して | 教育学部附属光小学校教諭 | 河村 美成 |
| 2) サイエンスワールドに参加して | 教育学部 4 年 | 三奈木彰人 |
| 3) カンボジア教育支援の現状と展望 ～理科と保健体育の支援を通して～ | 教育学部保健体育選修教授 | 海野 勇三 |
| | 教育学部理科教育選修教授 | 和泉 研二 |

講評：山口県教育庁義務教育課指導主事 福江 功至

参加申し込み・問い合わせ方法

宛先：rika-gp-ed@ml.cc.yamaguchi-u.ac.jp 内容：氏名・所属・連絡先
件名：理科ちゃぶ研修会申し込み 締め切り：12 月 19 日（水）

主催：山口大学教育学部 / 共催：山口県教育委員会

平成24年度 現地支援・調査活動実施者

- 和泉研二 山口大学教育学部理科教育選修・教授
(現地支援活動グループ代表)
- 友定保博 山口大学教育学部保健体育選修・教育
- 海野勇三 山口大学教育学部保健体育選修・教授
- 佐伯里英子 山口大学教育学部附属総合教育実践センター
・客員准教授 (元養護教諭)
- 鎌田潤一 山口大学教育学部附属光小学校・教諭
(附属光小学校理科部)
- 入江航生 山口大学教育学部保健体育選修・3年
(運動会 学生ボランティア団長)